



1429年、琉球は第一尚氏の尚巴志によって統一されました。今から600年ほど前のことです。しかし、統一した国になったとはいえ、王位の継承を争って1453年に「志魯・布里の乱」が起きるなど、決して安定した政権とはいえませんでした。

そのような中、尚泰久(1415~1460年、在位は1454~1460年)が第一尚氏王統第6代の王位に就きました。相次いだ争いに心を痛めた尚泰久王は、琉球国を平和で安定した社会にするため、天尊廟の鐘を造ったのを始めとして、広厳寺や普門禅寺などを次々と建立し、鐘を鑄造して寄進しました。仏教の力で新たに平和な琉球を創っていかうとしたのです。尚泰久王が建立した寺や宮に寄進した鐘は23口にもものぼります。いかに尚泰久王が、仏教の力を信じていたかがわかります。中でも「旧首里城正殿鐘」(142ページ)、「旧霊応寺鐘」(146ページ)、「旧普門禅寺鐘」(147ページ)、「旧天龍精舎鐘」(148ページ)、「旧天尊寺鐘」(149ページ)、「旧天妃宮鐘」(150ページ)、「旧一品権現鐘」(151ページ)、「旧天界禅寺鐘」(152ページ)、「旧竜翔寺鐘」(153ページ)、「旧大安禅寺鐘」(154ページ)の10口の鐘は、国や県の有形文化財に指定されています。尚泰久王の鑄造した鐘が、いかに価値が高いものかが理解できます。

しかし、尚泰久王の願いもむなしく、1458年には「護佐丸・阿麻和利の乱」が起きてしまいます。尚泰久王の胸中はいかばかりであったでしょうか。

王の鑄造した鐘として一番有名なのは、旧首里城正殿鐘(万国津梁の鐘)です。この鐘の銘文には、琉球国の誇りと、国力の充実ぶりを描き、平和を希求する心が刻まれています。尚泰久王の願いは、いつの世の中でも変わらないもののように思われます。

尚泰久が鑄造した鐘一覧

①	1456 (景泰 7) 年	大聖寺	⑬	1457 (景泰 8) 年	大禅寺
②	1456 (景泰 7) 年	天尊殿	⑭	1457 (景泰 8) 年	上天妃宮
③	1456 (景泰 7) 年	相国寺	⑮	1457 (景泰 8) 年	天妃宮
④	1456 (景泰 7) 年	普門禅寺	⑯	1457 (景泰 8) 年	竜翔寺
⑤	1456 (景泰 7) 年	健善寺	⑰	1457 (天順元) 年	潮音寺
⑥	1456 (景泰 7) 年	長寿寺	⑱	1457 (天順元) 年	万寿寺
⑦	1456 (景泰 7) 年	天竜寺	⑲	1457 (天順元) 年	魏古寺
⑧	1456 (景泰 7) 年	広厳寺	⑳	1458 (天順 2) 年	永代院
⑨	1456 (景泰 7) 年	報恩寺	㉑	1458 (天順 2) 年	首里城正殿
⑩	1456 (景泰 7) 年	大安寺	㉒	1459 (天順 3) 年	一品権現御宝殿
⑪	1457 (景泰 8) 年	霊応寺	㉓	1459 (天順 3) 年	東光寺
⑫	1457 (景泰 8) 年	永福寺			

【参考文献】

沖縄大百科事典刊行事務局編、1983年、『沖縄大百科事典』、沖縄タイムス社
 知名定寛、2008年、『琉球仏教史の研究』、榕樹書林

国指定重要文化財(昭53.6.15)

銅鐘

(旧首里城正殿鐘)

1口 総高156.0cm 口径92.2cm



沖縄県知事の応接室にも、この鐘の銘文が飾られているよね。



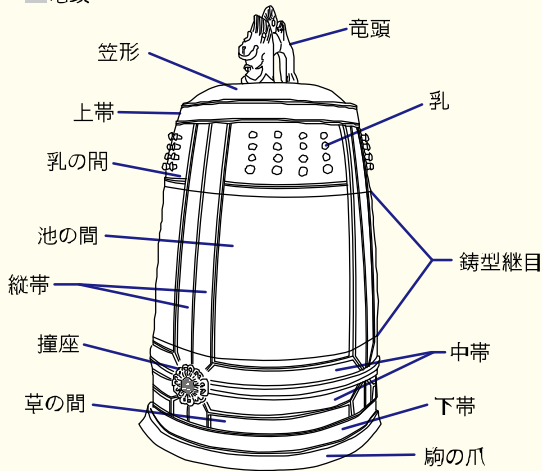
琉球の人たちのスケールの大きさがわかる銘文だね。現在の福岡県の人で峠原阿善という人が作ったんだよ。重さは721kgもあるんだ。今は、那覇市おもろまちの県立博物館で展示されているよ。



梵鐘に刻まれた大交易時代の琉球の姿



■ 竜頭



参考資料「日本の梵鐘 新装版」(2019年, 吉川弘文館)



■ 銅鐘(旧首里城正殿鐘)

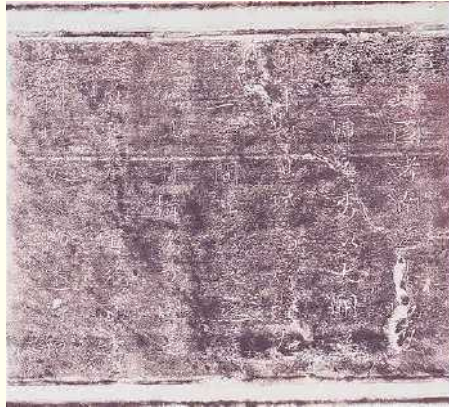


■ 撞座

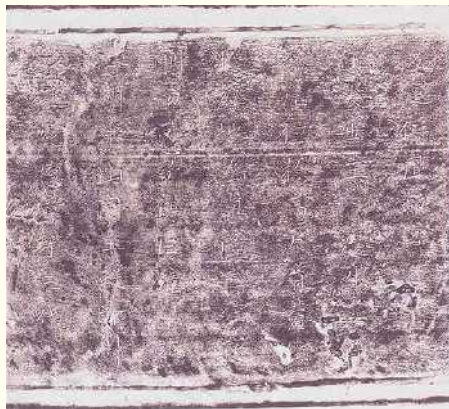
鐘に刻まれた文章から、別名「万国津梁の鐘」と呼ばれています。

1458(天順2)年6月に尚泰久王の命令で制作され、首里城正殿に掛けられました。銘文は相国寺の住職溪隱によるもので、「琉球国は南海の勝地にして・・・」という書き出しで始まり、中国や朝鮮、東南アジア諸国などと盛んに交易した時代に、船をあやつり大海を往来する琉球の人々の勇ましい姿や異国の宝に満ちあふれ、繁栄する国家像を表現しています。

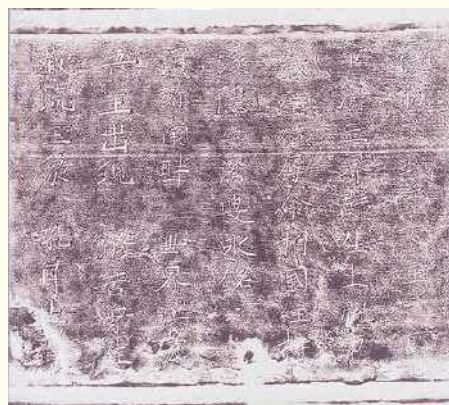
この銅鐘は戦時中、金属供出を免れましたが、沖縄戦による数多くの傷跡が見られ、その中には鉄砲の弾が貫通した部分もあります。大交易時代の琉球国の繁栄とともに、「鉄の暴風」が吹き荒れた沖縄戦の悲惨さの両方が刻み込まれた文化財です。



琉球国者南海勝地而
鐘三韓之秀以大明為
輔車以日域為唇齒在
此二中間湧出之蓬萊
島也以舟楫為万国之
津梁異産至宝充滿十
方利地靈人物遠扇和



夏之仁風故吾
王大世主寅庚慶生久泰尚茲
承宝位於高天育蒼生
於厚地為興隆二宝報
酬四恩新鑄巨鐘以就
本州中山国王殿前掛
着之定憲章于二代之



後戡文武于百王之前
下濟三界群生上祝万
歲宝位辱命相国住持
溪隱安潜叟求銘々日
須弥南畔 世界洪宏
吾王山現 濟苦衆生
截流玉象 吼月華鯨



泛溢四海 震梵音声
覺長夜夢 輪感天誠
堯風永扇 舜日益明
寅戌六月十九日亥辛
大工藤原国善
住相国溪隱叟誌之

旧首里城正殿銅鐘銘(万国津梁の鐘) [拓本] 沖縄県立図書館所蔵 CC BY 4.0 (<http://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>)

【参考文献】

沖縄県教育庁文化財課, 2017年, 『沖縄県史 各論編 第六巻』, 沖縄県教育委員会
沖縄大百科事典刊行事務局編, 1983年, 『沖縄大百科事典』, 沖縄タイムス社
「沖縄を知る事典」編集委員会, 2000年, 『沖縄を知る事典』, 日本アソシエーツ

梵鐘

ぎゅう えん かく し でん ぜん しょう でん ちゅう しょう ろう しょう
(旧円覚寺殿前鐘・殿中鐘・楼鐘)

3口 殿前鐘 総高114.3cm 口径72.0cm 殿中鐘 総高77.5cm 口径49.0cm 楼鐘 総高207.9cm 口径118.5cm



円覚寺って、
すごく大きな寺
だったんたろうね。

円覚寺は、第二尚氏王統第三
代国王の尚貞が丁家の菩提寺
として建立した寺だよ。殿前鐘
と殿中鐘は、1495年に完成し
た翌年、尚貞王が円覚寺に備
え付けた鐘で、鐘楼は、京都の
「大工宗味」が作った鐘なん
だよ。



旧円覚寺の梵鐘トリオ



竜頭(旧円覚寺殿前鐘)



地藏菩薩立像(旧円覚寺殿前鐘)



梵鐘(旧円覚寺殿前鐘)



撞座(旧円覚寺殿前鐘)



金象嵌「今上世主尚貞王宮生」
(旧円覚寺殿前鐘)

この3つの梵鐘は、いずれも円覚寺に掛けられていたものです。

殿前鐘と殿中鐘は1495(弘治8)年の铸造です。殿前鐘の縦帯上部の飛雲上には地藏菩薩立像が一体ずつ作られ、「今上世主尚貞王宮生」の9文字の金象嵌が入られています。殿中鐘は、殿前鐘に比べて小さいですが形式はほぼ同じです。菩薩像はなく、「尚貞帝王」「檀施之善利壮乎叢」「帝道益固」の金象嵌文字があります。

楼鐘は1496(弘治9)年に铸造されましたが、

作られて100余年の間に失われたので、1697(康熙36)年に再铸造されました。高さ207.9cm、口径118.5cm、重量約1.8tもある沖縄最大の鐘です。

沖縄の鐘はいずれも中国年号が刻まれながら、日本の鐘の特徴を持っています。殿前鐘と殿中鐘の作者である大和相秀は、周防(現在の山口県の一部)の铸物師で、作品は兵庫県の円照寺にも残っています。銘文中の金象嵌や地藏菩薩のレリーフは、この梵鐘の特徴となっています。





竜頭(旧円覚寺殿中鐘)



梵鐘(旧円覚寺殿中鐘)



撞座(旧円覚寺殿中鐘)



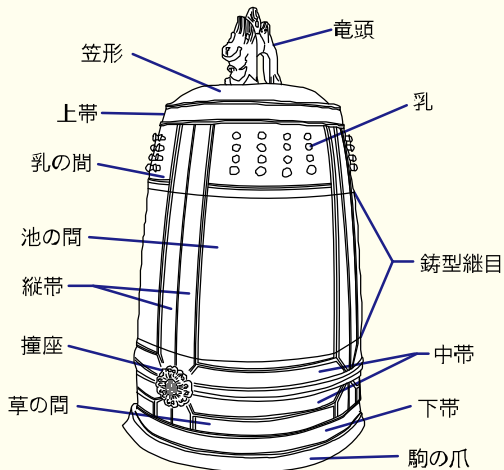
金象嵌「檀施之善利壯乎叢」
(旧円覚寺殿中鐘)



竜頭(旧円覚寺楼鐘)

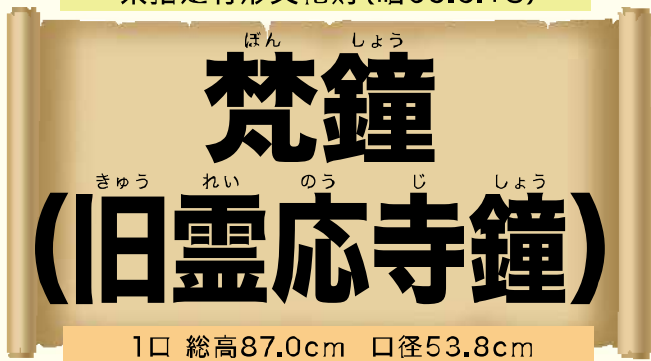


撞座(旧円覚寺鐘楼)



梵鐘(旧円覚寺鐘楼)

【参考文献】
坪井良平, 2019年, 『日本の梵鐘』, 吉川弘文館
国立文化財機構東京国立博物館他, 2010年, 『日本の美術』, ぎょうせい
沖縄大百科事典刊行事務局編, 1983年, 『沖縄大百科事典』, 沖縄タイムス社



だれが、
どのような目的で
作らせたかわかって
いません。



記録に残っていない霊応寺が、
存在していたことを示す貴重な
鐘だよ。また、米軍が引き上
げたあとは、平安座中学校や
区長、区民の方々が大事に保
管していたんだ。



15世紀の琉球の鑄造技術



竜頭(旧霊応寺鐘)



撞座(旧霊応寺鐘)

梵鐘(旧霊応寺鐘)

霊応寺に関しては『琉球国由来記』(1713年)や、『琉球国旧記』(1731年)等に記載がなく、現在のところはっきり分かりません。しかし鐘については銘文から1457(天順1)年に鑄造されたことや奉行・与那福、中西が製作責任者であることがわかります。

沖縄戦終了直後、与那城村(現在のうるま市)に駐屯した米軍がどこからか持ってきたものと言われています。一時期は、与那城村で「平和の鐘」として撞き鳴らされていましたが、その後転々と移動して、1956(昭和31)年5月に当時の琉球政府立博物館に移管されました。

県指定有形文化財(昭60.6.18)



久茂地って、
普門禪寺から
名付けられたんだ。

県立図書館蔵の「久茂地
村屋敷図」という古地図に
載っているよ。



ぼん しょう
梵鐘

ぎゅう ふもんぜんじ しょう
(旧普門禪寺鐘)

1口 総高63.0cm 口径50.6cm



久茂地の語源になった寺の鐘



梵鐘(旧普門禪寺鐘)



欠損竜頭(旧普門禪寺鐘)



撞座(旧普門禪寺鐘)

ふもんぜんじ しょうたいぎゅう
普門禪寺は尚泰久王代(在位:1454～
1460年)に芥隠が創建したと言われ、袋中上
かいいん そうひん たいちゅうじょう
人の『琉球神道記』(1605年)には弥勒菩薩
にん りゅうきゅうしんどうき みろくぼまつ
道場として記されています。梵鐘は1456(景
どうじょう ぼんしょう けい
泰7)年の铸造です。

1713(康熙52)年刊の『琉球国由来記』で
こうき りゅうきゅうこく ゆらいき
は、普門禪寺はすでに廃寺になっています。ま
ふもんぜんじ さいじ

りゅうきゅうこく ゆらいき とうえいぎゅうざ ぜんしゅう
た、『琉球国由来記』の巻9「唐榮旧記全集」
には、かつての唐榮の東「普文寺村」に同寺が
とうえい ふもんじむら
あり、地名はこれに由来するとあります。この「
普門寺村」は現在の久茂地だと言われている
ふもんじむら くらた

本資料は、竜頭および乳の間の一部が欠
損しています。

県指定有形文化財(昭60.6.18)

梵鐘

(旧天竜精舎鐘)

1口 総高117.2cm 口径70.3cm



大事に
保管してくれた
鳥取の方々に
感謝だね。

戦争中は、物資が不足して
いたから、お寺の鐘までも
が、軍に差し出さなければ
いけなかったんだ。尚泰
久王の時代、安潜という人
が銘文を作ったんだ。



戦争時の供出から生き残った鐘



①梵鐘(旧天竜精舎鐘)



竜頭(旧天竜精舎鐘)



撞座(旧天竜精舎鐘)

天竜寺は、臨濟宗の僧芥隠によって1456
(景泰7)年に創建され、この梵鐘はその時に
掛けられました。

袋中上人の『琉球神道記』(1605年)では
「薬師瑠璃光如来道場」の一つにあげられて
います。『琉球国由来記』(1713年)編集の時

点ではすでに廃寺となっており、梵鐘は天王
寺に移されていきました。その後、鐘は安国寺に
移されましたが、1944(昭和19)年に軍需資
材として供出されました。戦後、鳥取県青谷町
の弥勒寺に現存していることが分かり、1962
(昭和37)年、沖縄県に返還されました。

(写真提供: ①沖縄県立博物館・美術館)



中国の神様を祀るところに
日本式の鐘が架かってるん
だ。琉球らしいね。

琉球の人によって作られた
珍しい鐘で、尚泰久土時代
に作られたんだよ。



梵鐘 (旧天尊殿鐘)

1口 総高77.3cm 口径50.5cm



道教の神を祀る廟の鐘



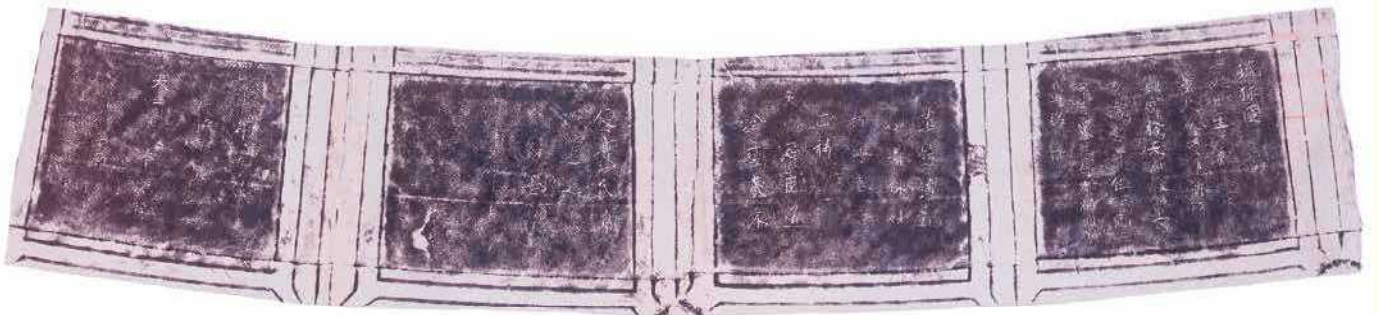
■ 梵鐘(旧天尊殿鐘)



■ 竜頭(旧天尊殿鐘)



■ 撞座(旧天尊殿鐘)



■ 旧天尊殿巨鐘銘 [拓本] 沖縄県立図書館所蔵 CC BY 4.0
(<http://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>)

天尊殿(天尊廟)の創建された時期は不明
ですが、『琉球国由来記』(1713年)では閩人
三十六姓来琉の時に建立されたとし、同じ時期
に北京から天尊神像を持ってきて廟を建てた
と記されています。

また、1756(乾隆21)年に中国からきた冊
封使周煌の著作『琉球国志略』(1757年)で
は、雷声普化天尊を祀るとあります。この神は
正式には「九天応元雷声普化天尊」という道

教の神で、中国では一般に現世の邪悪を滅ぼ
して人々を助ける神と考えられています。

廟はもと唐栄(久米村)の西門外にあったと
されますが、現在は護国寺の隣にあります。

この鐘は、1456(景泰7)年に鑄造され、鐘
銘に大工国吉、奉行知賢、与那福、中西の名
が刻まれています。中国との文化交流史およ
び沖縄の宗教史を知る上で貴重な資料です。

県指定有形文化財(昭60.6.18)

梵鐘 (旧天妃宮鐘)

1口 総高98.0cm 口径61.6cm



天妃小学校の名前の由来となった寺廟にあった鐘なんだね。



今は波の上宮の近くにあるんだね。久米村の人たちが大事に守っていたんだ。



航海安全、天妃の信仰を伝える銅鐘



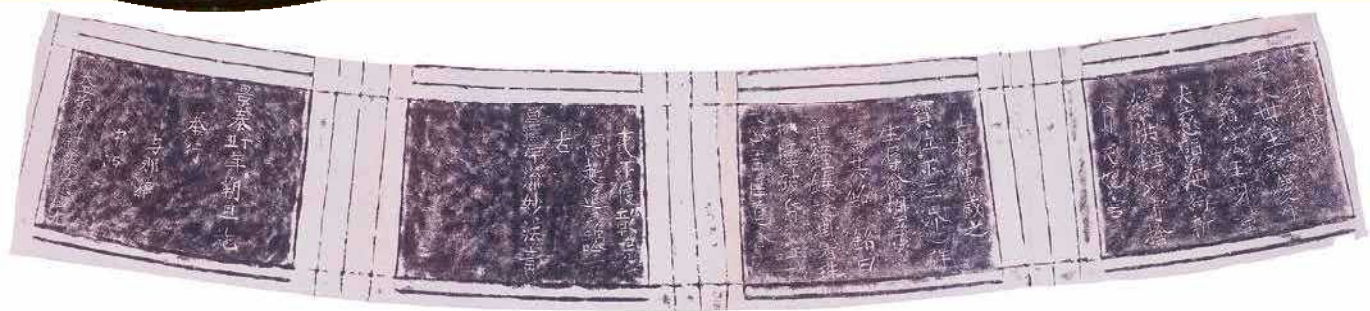
① 梵鐘(旧天妃宮鐘)



竜頭(旧天妃宮鐘)



拵座(旧天妃宮鐘)



旧天妃宮洪鐘銘【拓本】 沖縄県立図書館所蔵 CC BY 4.0 (<http://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>)

天妃は、天后あるいは天上聖母とも呼ばれ、中国では一般に媽祖と呼ばれています。10世紀半ばに中国福建省莆田市で発生したと言われる民間信仰で、同地や周辺地域の船乗りや航海業者の守護神となり、明代には中国各地から東南アジアまで広く伝わりました。やがて、琉球にもこれが伝わり、海陸を問わず祀られ、航海安全が祈願されました。

『琉球国由来記』(1713年)によれば、天妃宮(下天妃宮)は尚巴志王代の創建(1424(永楽22)年)とあり、鐘銘には、奉行与那福、中西の名とともに景泰丁丑年と刻まれているため、創建から30年余後の1457年に鑄造されたことがわかります。

中国との文化交流史、沖縄宗教史を研究する上で貴重な鐘です。